

汪良書法集



西泠印社出版

汪良書法集



西泠印社出版

二零零一年·杭州

图书在版编目(CIP)数据

汪良书法集 / 汪良书. — 杭州: 西泠印社, 2001.3

ISBN 7-80517-502-0

I. 汪... II. 汪... III. 汉字—书法—中国—现代 IV. J292.28

中国版本图书馆CIP数据核字(2001)第10067号

西泠印社出版发行

杭州东坡路90号 (邮政编码: 310006)

责任编辑: 李 早 责任出版: 叶 涵
全国新华书店经销 浙江印刷集团公司印刷

开本: 889X1194 1/16 印张: 3

2001年3月第1版 第1次印刷

印数: 0001—2000

ISBN 7-80517-502-0/J 5·03

定价: 80.00元

書，如也

——觀汪良書法感言

書，如也，如其學，如其才，如其志，總之曰如其人而已。（劉熙載《藝概》）

汪良先生是著名的播音藝術家。七十年代，即以小說播講知名全國。他不但有豐富的播講藝術的實踐經驗，而且又有理論著述。其專著《小說播講藝術》，精湛宏富，有對小說創作本身的剖析與研究，有對古今有聲藝術文化資源的梳理與承繼，有對藝術創作

心理學和接受美學的吸納與闡發，以多學科的知識為基石，建構播講藝術的理論，論述有聲語言藝術的審美特征和創作規律。他的新著《大陸傳媒與網絡的預言》，更以新聞工作者的敏銳，對我國傳媒與網絡做了多方位的考察與探討。在「網絡的巨艦將負

載着我們進入令人向往的世界」的今天，該書的適時出版，具有積極的現實意義和前衛性。

汪良的論著，睿智與機鋒迭出，幽默與情采泉湧，取博用約，左右逢源，其學也博。他的書法與其學養相表里，與專業書法家的書法不同，而具有文化人書法的共性：以情見勝，意多於法，解衣槃礴，以書暢志。

如他的書法「把酒臨風，寵辱皆忘」，「悟道，朝聞道夕死可也」等，都不拘法度，坦露情志，筆墨意趣洋溢於運思與結體之間。

汪良書寫的自作詩「登鵲嶺」等條幅，運筆暢達，興到筆隨，參差錯落，頗得自然之趣。

汪良對鄭燮的書法頗為激賞。以詩書畫三絕著稱的鄭板橋獨創「六分半書」，融行楷、篆法、畫意於其中。汪良的書藝頗受其影響。我以為影響主要不在書中的形神，而在藝術創作「領異標新」的勇氣和精神。汪良曾多次書寫鄭燮的名句「刪繁就簡三秋樹，領異標新二月花」，流露出他的藝術追求。

「板橋體」書法因其變化多端，跌宕有致，極盡灑落的天趣，有「雨夾雪」之譽。汪良的書法，筆姿奇縱，百態橫生，得板橋的啟迪。在布局上，他大膽地誇張字的姿勢，比例，故有焦雷驚空，孤峰拔地之氣象，體現着他對全篇畫意的追求。「板橋作字如寫蘭」，

汪良更是常以畫意入書，如他的「龍」，運筆蒼勁，取勢側欹，結體若團蜷虬屈之蟠龍，含勃發欲動之態勢。「車水馬龍」則更見奇趣。

「車」「馬」二字以篆為體，「車」字結體求圓，暗喻輪、輻，「馬」字取勢前衝，寓拖車飛行之意，而

馬字之四點，又似「水」之流行，渾為一體，讓人悟「龍」的意象。這些湊趣的作品，也都書有畫意。

汪良的斗方「品茶」，行書中隱通隸意，「香茶可代酒，濃是故人情」一語，在字的意態

風神中增添諸多情趣。而他的「兩個黃鸝鳴翠柳」等作品，更是流麗頓挫，磅礴之氣盈篇。

欣賞汪良寫的「人生易老天難老」，又似乎在聽他朗誦毛澤東詩詞。情感投入，語勢

把握準確，字的長短、大小、輕重、斷續，又讓人聯想到朗誦中的長吟、重音、停連、

節奏，結合詩境來品味，其字里行間頓生時空感、運動感，和廣闊的視覺想象。

書如其人。他的書法創作無處不流露其修養、其才情。筆墨性情，皆以

其人之性情為本。抒寫性靈乃書之要務。以風骨為體，以變化為用，情至文生，意忘工拙。這就是汪良書藝的審美特征。

夏 碩 琦

二零零零年十二月十五日

于天道酬勤書屋



書は如し也

——汪良氏の書道から感ずること

「書は如し也。其の学の如し、其の才能の如し、其の志の如し、総じて其の人の如し也と言えり。」（劉熙載『芸概』）

汪良氏は著名なアナウンサーで、70年代からすでに小説のラジオ放送で全中国に名を知られていた。氏は豊富なラジオ放送芸術の実践経験に富むのばかりでなく、理論著作も著している。

氏の著作である『小説ラジオ放送芸術』は、内容豊かで、広範に論述を展開している。中には、小説創作そのものについての解析と研究もあれば、古今の音声芸術文化資源についての整理と継承もあり、芸術創作心理学と受容美学の吸収と解釈もある。氏は多学科の知識を基礎に、放送芸術の理論を構築し、音声芸術の審美特徴と創作規律を論述している。

氏の新著である『大陸におけるメディアとインターネットの予言』においては、氏はさらにメディア従事者の敏感を以って我が国におけるメディアとインターネットに対して多方面から考察をし、検討をしている。「インターネットの巨艦がわれわれを載せて夢の世界へ向かう」今日に、氏の新著の出版は適時で、積極的な現実と前衛的意義を持つていたのであろう。

汪良氏の著作は叢智と啓発が頻出し、ユーモアと感情に富み、膨大な資料から自由自在に取捨することはその博学を示している。氏の書道も氏の教養と相表裏をなし、プロの書道家の書風とは異なりながらも、個性に優れ、意匠を重んじ、作法に拘らずに書を以って志を明示しする文人書画と共通性を有している。

氏の作品である「把酒臨風、寵辱皆忘」と「悟道、朝聞道夕死可也。」などは、作法に拘らず、感情と志を存分に示し、筆と墨の趣向が作品の案配と結構に溢れてでている。

汪良氏が書した自作詩『鵲嶺に登る』などの軸は筆勢が流暢に意のままに運ばれ、長短濃淡の変化に富み、頗る自然の趣きを得ている。

汪良氏は鄭燮の書道を激賞している。詩書画の「三絶技」で名を知られている鄭板橋が独創した「六分半書」は楷書、篆字、画意を一体に融合しており、汪良氏の書道は強くその影響を受けている。私には、その影響は形が相似するのにあるのではなく、芸術創作においての「領異標新」（新奇を銜い、作新すること）勇氣と精神にあると思われる。汪良氏が何回も鄭燮の名句である「刪繁就簡三秋樹、領異標新二月花」を書することは氏の芸術的追求を表していると言えよう。

「板橋体」書道は長短濃淡の変化に富み、洒落た自然の趣きを極め、雲の美名を頂いている。汪良氏の書道は、筆勢が奇異で、百態を呈し、深く板橋から啓発を得ている。氏が誇張に字の姿と比例を案配するため、書道作品は雷が空を驚かし、孤峰が平地に聳え立つような気象を具している。そして「板橋作字、蘭を書くがごとし」というように、汪良氏は常に画意を以って書道作品を書している。例えば氏の作品である『龍』は、筆勢が力強く、斜めにその勢いを取り、全体からみれば、まさに蟠っている



龍が急に昇天しようとしている風に見えてくる。『車水馬龍』においてはさらにその奇異な趣きを呈している。「車」と「馬」の二字は篆字で書し、結構から言えば、「車」は丸みがあり、暗に車輪、輻を比喻し、「馬」は前傾きに勢いを取り、馬車を引きずって疾走する意を含んでいるが、「馬」の四つの点の書き方にいたってはまた水流のように書し、それが「龍」の字と渾然に一体をなし、鑑賞者に「龍」のイメージを悟らせる。これらの作品は皆「書に画意あり」と言えよう。

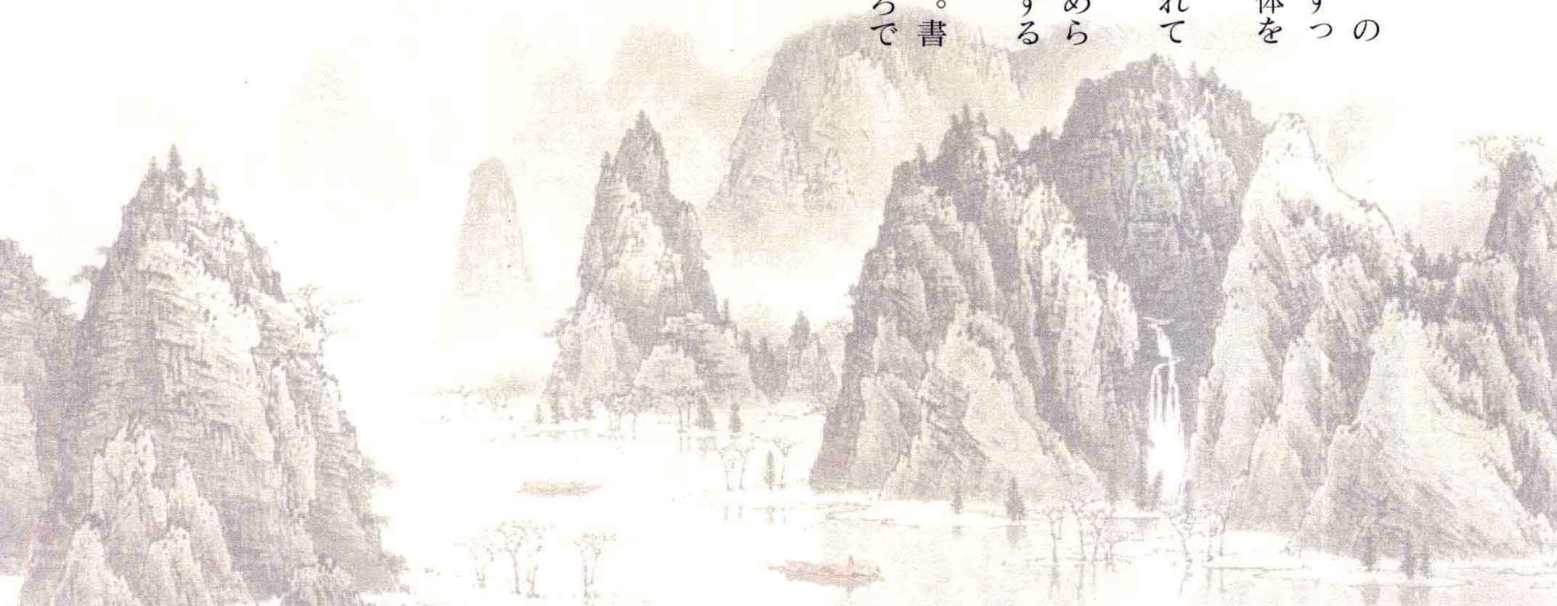
汪良氏の闢方『品茶』は、筆勢の運びに意を隠し、「香茶可代酒、濃是故人情」の一句は、字の形と風格に多くの趣きを入れている。また氏の「兩個黃鸝鳴翠柳」などの作品にいたってはいつそうに流麗さと勢いを増している。

氏が書した「人生易老天難老」を鑑賞するにあたっては、氏が毛沢東の詩歌を朗読しているように感じられる。作品にこめられる感情、字の長短、大小、軽重、断続はまさに朗読における長吟、重音、間隔、リズムを連想させ、詩境をあわせて吟味すると、作品に含まれる空間、運動感、広々とした視覚想像が一気に生まれてくる。

書はその人のごとし。氏の書道作品のいたるところに氏の教養、才能が現れている。筆と墨の性質は人間の性質を本とする。書道の要は本性を書き記すことにある。風骨を本とし、変化を手段とし、感情を込めば自然に作品が生まれ、意のいたるところでは手の拙きを忘れるというのが汪良氏書道の審美特徴と言えよう。

夏 碩 琦

二〇〇〇年十二月十五日於天道酬勤書屋



蠅頭小楷太勻停
常恐工書損性靈
急限采箋三百幅
宮中新製錦圍屏

蠅頭小楷太勻停
常恐工書損性靈
急限采箋三百幅
宮中新製錦圍屏

蠅頭小楷太勻停
常恐工書損性靈
急限采箋三百幅
宮中新製錦圍屏

老嫗論本之語
小楷太勻停

以書為畫



汪良



四十年來畫竹枝
日間揮寫夜間思
冗繁削盡留清瘦
畫到生時是熟時

鄭燮詩

凡



甲子年正月



竹枝日間揮



寫夜

思冗繁削盡留清瘦
畫到生時是熟時

生時是熟時



老梅鄭燮詩
汪良書



法無定法

無
法
無
人

小橋
汪良

山不在高 有仙則名 水不在深 有龍則靈 斯是陋室 唯吾德馨 苔痕上階綠 草色入簾青 談笑有鴻儒 往來無白丁
可以調素琴 閱金經 無絲竹之亂耳 無案牘之勞形 南陽諸葛廬 西蜀子雲亭 孔子云 何陋之有 劉禹錫 陋室銘

山不在高 有仙則名 水不在深 有龍則靈 斯是陋室 唯吾德馨 苔痕上階綠 草色入簾青 談笑有鴻儒 往來無白丁
可以調素琴 閱金經 無絲竹之亂耳 無案牘之勞形 南陽諸葛廬 西蜀子雲亭 孔子云 何陋之有

劉禹錫陋室銘書於漫其胸懷有者極鄭整之筆意 八楊良書



心中生妙

想世間

有奇石

龍年

秋寫

汪良



把酒臨風



龍辱皆忘



小松
汪良





衆鳥高
飛形
片孤雲
初去閒
小橋江良



大漠孤煙直
長河落日圓



唯明
羅道
真如
鐵



而今
邁
步
以
頭
越



毛澤東句
八
林



秦時明月漢時關
萬里長征人未還
但使龍城飛將在
不教胡馬度陰山
——王昌齡詩

秦時明月漢時關
萬里長征人未還
但使龍城飛將在
不教胡馬度陰山

王昌齡詩
汪良書於
書室之筆